

まや農園

宮崎 摩耶さん
久留米市／就農2年目



BLOF理論を学ぶと、
なぜ？が分かる

そこが栽培の面白さに
繋がっていく

(写真はまや農園提供)

以前からヨガのインストラクターとして活動していた宮崎さん。ヨガのレッスン後に飲んでいたハーブティーのハーブを自ら育てたいと思い立ち、知り合いの農家から借りた小さな畑で育てることに。そのときから栽培には土が大事ではないかと考え、ホームセンター等で資材を購入。ただ、購入した資材にどのような効果があるかまではわからず、納得がいきませんでした。

そこで知人を介し微生物（菌）を活用してトマトの生産を行う方に相談。その方からAGSAを紹介され、化学が大好きだという宮崎さんは入校を即決。8期生として学ぶことに。実習で食べたほうれんそうは、えぐみがなく本当に美味しく、宮崎さんはますます有機栽培に魅了。入校後半年で農業者になろうと思い始め、様々な有機栽培の先駆者に会いに行きました。

宮崎さんは当初、キウイフルーツを栽培したいと考えていましたが、久留米市内のぶどう生産者が後継者を探しているとの情報を得て、「ブドウも面白いかもかもしれない」と思い、ぶどう園（20a）を引き継ぐ形で2022年に就農。その際、ぶどう生産者が持っていた柿園（20a）も継承しました。

まや農園

栽培品目:ぶどう、柿(慣行栽培)

経営面積:約43a(ぶどう20a、柿20a、体験農園3a)

販路(ぶどう):ぶどう狩りの顧客等への直接販売

体験農園(野菜)の運営

AGSA講師・サポートスタッフ



Instagram

https://www.instagram.com/motherth_farm/reel/C1vU2Zdybfl/

有機栽培の実践

2年前に引き継いだぶどう園（品種：巨峰）では、BLOF理論に基づき、堆肥（有機質資材）の施用による物理性・生物性の改善、堆肥と有機肥料によるアミノ酸の補給、土壌分析・施肥設計に基づくミネラルの補給を実践。土壌分析は年1回。有機質資材はわら、パーク堆肥、竹チップパウダー等を利用。また、農薬不使用でいちごを栽培する生産者のアドバイスを受け、ぶどうの休眠期以外は、週1回の頻度で微生物資材（納豆菌、酵母菌、乳酸菌、放線菌及び光合成細菌）を散布。その他の栽培ノウハウは慣行栽培の生産者から習得しました。

この取組により、当初、10cm程度しか棒が刺さらなかった土壌が1年後は80cm程度刺さるくらい軟らかい土壌に。一方、減農薬栽培に転換した1年目は病気が多発。2年目（昨年）は、病気は抑えられた

ものの、花ぶるい（ぶどうの花（実）が落ちる現象）や7月の大雨による水害に。ただ、2年目にして「甘味と酸味がちょうど良く後味がすっきりした、昔ながらの味」を再現できたことに、宮崎さんは手ごたえを感じています。



ブドウの剪定作業の様子(来年のマヤブドウを想像しながら作業しています!)

(写真はまや農園提供)

経営面の取組・工夫

宮崎さんは、果実が実る状態でぶどう園とその管理に必要な機械を継承できたため、就農1年目から収入を確保、初期投資を抑制できました。

樹園地は基本、宮崎さんが一人で管理。袋掛けや剪定後の枝集めなどは、宮崎さんの知人などに手伝ってもらうことも。昨年にはぶどう狩りも始めました。

ほ場に施用する有機質資材（竹チップ）は、あるNPO法人が行う竹害対策の活動に参加する対価として入手。微生物資材（納豆菌や酵母）も自ら培養し、資材費を節約しています。

収穫したぶどうは、1年目はJAに出荷、2年目は宮崎さんのSNSを通じた呼びかけを見て、ぶどう狩りに訪れた方などに直接販売。JA出荷の場合より高い価格を設定しましたが、量が不足する程の売れ行きを経験。

また、宮崎さんは、3aの農地を借り、昨年の秋に女性（ママと子供）向けの有機栽培の指導型体験農園を始めました。農園では、参加者と一緒に「畑ヨガ」も。宮崎さんのレクチャーは参加者から「すぐわかりやすい」と好評だとか。

みんなとワイワイと喋りながら活動することが大好きな宮崎さんは、さらにAGSAの講師、サポートスタッフとしても活動しています。



有機質資材(竹チップ)の施用



体験農園

(写真はまや農園提供)

今後の展開

現在、AGSAの講師もしている宮崎さんは、有機栽培（BLOF理論）の指導者を目指し、ぶどう園で様々な実証を行い、そのデータを収集中です。また、書籍や動画サイトで土から上の栽培の知識について多くの発信がある一方、土から下のことについては意外と発信がないことに気づいた宮崎さんは、土壌医（土壌の専門家）も目指しています。また、その先も見据え、肥料業者にはない中立的な視点から土づくりを助言するコンサルタント業、土づくりを学ぶ講座の開設まで構想しています。

さらに、女性（ママと子供）を対象にした有機栽培の体験農園を今後10年間で全国100か所に設置したい構想も。宮崎さんは、体験農園を開設・運営する仲間（指導者）を増やすために、集客方法も含め自身が培ったノウハウをマニュアル化することにしていきます。

宮崎さんが、有機栽培の指導者になり、有機栽培の体験農園を全国展開する構想が実現することで、有機農業とともに、消費者の有機農業に対する理解の輪が広がることが期待されます。



園長 宮崎まやは、ママたちの農ある暮らしを全力でサポートさせていただきます♪

（写真はまや農園提供）

もっと聞いてみました！

Q. 花ぶるいでもぶどうが売れたのは？

A. 花ぶるいは、前年に多くの枝が病気で枯れたために短梢剪定を行った結果、発生（巨峰は本来、長梢剪定）。通常30粒程度の実がつくところ、酷い場合は5～10粒程度。ものすごく落胆しましたが、今ある実を大切にしようと切り替え、育てるうちに徐々にブドウらしく。

実の数が少ないため、一粒が非常に大きく、カットして家庭向けに販売するなどの対応を図ると、逆に売れ行きが良かったです。また、実が少ないため色つきも良く、悪いことが起きてもそれなりに対応できることを学びました。

Q. 周囲の農業者との関わりは？

A. 有機栽培でよく言われる雑草に関しては、迷惑をかけないように管理（草刈り）しているので、周囲の生産者から苦情を受けたことは特段ありません。就農後まだ年数が短いこともあり、周囲の方と打ち解けるように努力しています。

Q. 有機栽培の体験農園の反響は？

A. 体験農園には、福岡市や北九州市からママと子どもでの参加が多いです。参加の皆さんは、自ら野菜を育てて収穫する楽しみのほか、この場所に癒されに来ている面もあるようです。

元々、関心があって参加しているとは思いますが、実際に体験することで、土づくりの大切さに気づき、興味も深まっていると思います。

有機農業の拡大には消費者の理解も必要であり、理解の推進に体験農園は大切な活動だと思っています。次の春夏コースの問い合わせも殺到中です。



(写真はまや農園提供)

Q. AGSAについて思うことは？

A. 農業を毎日行っていると、「楽しい」とか「自然に癒される」感覚は当たり前になってきて農業を続けるモチベーションではなくなります。

唯一、「おもしろ～い！！」という感覚が意欲や元気の源になっていると思います。そのためは、「何故かが解る」ことが大切であり、AGSAで学ぶことはその近道だと思います。